

第十二章 花柳界及料理飲食店宿屋 其他興行物の状況

(大正十二年十一月末調)

震火後罹災した藝者屋は勿論、罹災しなかつたものも、一時休んでゐたが、最近になつて残存家屋あるものは、之を利用し、殆んど大部開業した。焼失したのも、バラックで開業しようとする準備中であるから、復舊も近いであらう。

焼失区域内の藝妓の約半数は歸郷し、若しくは他に避難してゐたが、最近になつては、著々開業の準備が出来て、鶴見の如きは、既に全部就業した。横濱なども其の二割は就業して居る。

貸座敷中焼失を免かれた神奈川・保土ヶ谷等は、既に全部開業した。

貸座敷が焼失した横濱遊廓の娼妓は、尠なからざる死者を出したが、現在は約五百名ゐる。貸座敷が既に著々開業の準備に着手したので、落成開業の準備成ると同時に、漸次歸つて来て、就業するであらう。

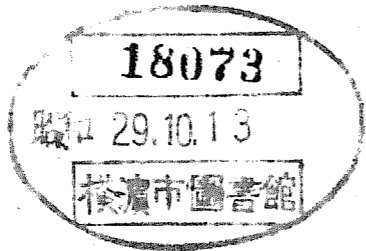
酌婦其の他の雇女は、横濱市に災害當時百名餘あつたが、現在は三十六名である。

市内の料理店・飲食店・待合・料理・飲食店等の状況を見ると、大料理店は、未だ開業の運びに至らないものが多い。小料理店及飲食店は、共に七八分通りバラック又は残存家屋で開業して居り、就中飲食店は各所相當繁昌して居る。震災前のそれに比し、約七八分通りは営業して居る。

湯屋は公設浴場と現在開業して居るものは、磯子・根岸・井土ヶ谷・本牧等の残存地域だけで甚だ少いが、漸次建築中である。

宿屋の復舊は、遅いやうであるが、神奈川の如きは殆んど震災前に異ならざる數となり、其の他復舊が遅いのは、其の必要ない爲めであらう。

興業物の復興に就いて述べれば、先づ活動寫真館のオデヲン座は、座主の死亡により、再興は不可能と云はれて居たが、持主前ニイロップ商會主ワンデルマン氏から、速かに再起せよとの電報が来たので、近く再興される筈との事である。角力常設館主は先年墜落の不祥事を惹起し、之に基因して興行界を引退し、閑地にあつて時期の到來を待つて居たが、捲土重來の勢を以て再起し、既に建築許可願を提出して、諸事準備中である。敷島館は角の瀬戸物屋の一角まで取擴げ、建築に着手した。喜樂座は裏の茶屋きくやま



横濱市震災誌第三册終

で打通し、近く建築に取掛り、年内十二月廿日には開場すると方んで居る。朝日座は早くも観客席の椅子の注文を出し、これも喜樂座と相前後して開ける氣勢を示してゐる。横濱座は長島町の一角に轉じて建築せんとしてゐる。以上は何れも半永久的のバラックである。此外に又樂館、其他戸部の活動俱樂部、神奈川の神奈川演藝館、平沼の由村座、松影町の美奈登館等の内、戸部の活動俱樂部は目下建設完成を急ぎつつあるので、市内に於ては開館の魁をなし、神奈川演藝館も年内には開場に至るであらう。由村座、美奈登館、戸部常設館、横濱劇場等は、未知數に屬するが、先づ建築の方針ではある。目下の大勢は斯くの如き状態であるが、興行界は年内に回復し、來るべき初春を期し、一齊に開場して、震災前に見るやうな一大觀樂境を現出するに努めてゐる。

六五〇

(十一月二十七日調)

刷印日十月一十年五十五正大
行發日五十月一十年五十五正大

著作兼
發行人

横濱市役所市史編纂係

印刷人

横濱市根岸町竹ノ丸三、二八八番地
大橋 徳 壽
電話本局〇七九三番

印刷所

横濱市相生町三丁目五十一番地
大橋活版印刷所
電話本局五、七七二番
四、八〇番

品 賣 非

釘 2. 3. 7.

積
嘉

積
嘉

